

日本において独自に発達した 児童舞踊の現状

田 中 良 江

【目的】

日本の舞踊のジャンルの一つに数えられる「児童舞踊」については、一般にはお遊戯、童謡舞踊という見方がある。現在の児童舞踊のステージ活動の一部門「児童舞踊コンクール」では、はるかにお遊戯の段階を越えたものがある。「児童舞踊の意義」を問い、作品内容を考察する。

【方法】

- 1) 児童舞踊の意義についての諸説を児童舞踊年史他から収録
- 2) 作品内容考察として東京新聞主催、第50回(1993年)、第51回(1994年)舞踊コンクール児童舞踊部参加作品の入選作品59曲を対象として、題名、テーマ、振り付け、舞踊構成、テクニックの視点から分析する。

【児童舞踊の意義】

「児童舞踊は、その名称の示す通り、義務教育中の児童生徒を対象とする踊りである。芸術の分野に属しつつもその傾向や、内容、形式において種々制限のあることは当然であって、人間形成の最も大切な時期にあるこれら児童生徒の心身の発達段階に応じて、無理なく舞踊訓練を施し、身体的にも、思想、感情にもあくまで教育的立場を守らなくてはならない。リズム教育の指導、身体的発達の助長や、情操性、創造性の伸展をはかり、同時に人間育成の糧とすることにある。すなわち、子供が舞踊するということが、同時に子供自身の生活であり、子供自身の生活そのものを舞踊芸術の中に再現するものである。」が丸岡説。柿沢説は「子供の舞踊教育の研究は浅い。大人の縮小版として指導してはいけない。児童には児童の感じ方、理解の仕方があって、必ずしも大人と一致するものではない。」。時代が変わるが、この意義、精神は児童舞踊家が心すべきことであり、この点を留意し、作品考察をする。

【作品分析】

舞踊コンクール児童部参加規定によると、参加者の年齢は5年度は昭和52年4月2日以降の誕生者、6年度は53年4月2日以降の誕生者、すなわち中学生3年以下となる。制限時間4分以内、題名作品内容は自由である。

【題名、テーマ】

多様な題名、テーマを自然、子供の環境、心理、童謡、動物、民謡、その他に種別した。自然、子供の環境から選んだものが多い。

【表現の方法】

テーマに対してモチーフを重ね、動物と子供の愛情表現をする「子犬物語」のように子供が理解できるように具象化したものが多く見られる。具象化するために、体で表現する以上に小道具を使用し、作品構成上、持ち時間4分の作品に対して場面転換が多く、そのため舞台の出入りが激しく、説明だけに追われる作品がある。音楽においても童謡のみ使用したものはわずか3曲であり、ほとんどの作品が構成されたものであり、細かくきざみ過ぎているものもある。上位入賞作品はこの点の整理ができ、舞踊内容をもり立てている。人数構成は参加曲数59曲中、3名以下の参加はなく、4名以上の群部構成による参加であり、5名以内の少人数の参加曲数は3曲のみ、10名以上の構成が多数である。子供の減少また受験準備の影響が同一年齢での組舞は59曲中8曲で、作品のテーマ選びの困難が見られる。[舞踊表現のテクニック]はその作品の指導者の舞踊体験により表現法が違う。どのようなものであっても子供自身の技術は高度になっている。子供の成長過程の中で、その年齢の時でないとは出来ない動き、大人に真似の出来ない子供の自然な動きが児童舞踊の特徴としてあり作品に現れている。

バレエテクニックを主にした作品「幸福の苗を植えよう」、「緑黄色のシンフォニー」、民謡を素材とし新たに子供らしくした作品「おてもやん」、「安来の里」、童謡をもとに自由表現による作品「金のガチャウ」、児童舞踊の発達の本二本柱の一つ日本舞踊的形式美を打ち出した作品「恵比寿万歳より、めで鯛、めでたい」、児童舞踊の目的である子供の生活、子供の心を大切に作られた作品「マリオネット」、「ひとりぼっちじゃないよ」、「ねんど」をビデオ紹介した。

【結論】

現在の児童舞踊においては、指導者自身が子供のときから舞踊に携わっていた者が多く、何らかの形で舞踊テクニックを持ち、創作方法を舞踊教育で自然に身につけている。全日本児童舞踊協会の歴史上の指導方法として二つの方法があり、今日のコンクールにも指導者の師事系統に現れたように思う。すなわち先生の振り付けを先生を見ながら覚える方法であり、形は綺麗にまとまる。また一方では子供から引き出したものをまとめていく方法がある。子供から引き出した作品は生き生きとした感情があるが美的感覚が薄れる。これらは二代目会長、島田豊の日本舞踊を元にしたものと、初代会長、印牧季雄のヴィグマンの流れを汲む指導法が現在にも影響しているといえるのではないだろうか。いずれにしてもテクニック、創作方法ではレベルの向上があり、お遊戯を越えたものになった。然し、内容においては、良い作品で

はあるが、児童舞踊の意義を考えると疑問に思うものもある。児童部門が設けてあることに鑑み、これからの児童舞踊の育成を考えていくべきだと思う。

【参考文献】

児童舞踊70年史，舞踊コンクール50年史 資料提供：
東京新聞

協力：社団法人全日本児童舞踊協会 ビデオ